

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について： 特に「後赤壁賦」に焦点をあてて

正木, 佐枝子
九州大学：非常勤講師

<https://doi.org/10.15017/9645>

出版情報：中国文学論集. 27, pp.31-47, 1998-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：



日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について

——特に「後赤壁賦」に焦点をあてて——

正木 佐枝子

はじめに

中国宋代の文人蘇軾（字子瞻、号東坡居士、一〇三六～一一〇一年）は、筆禍事件である「烏台詩案」によって、元豊三年（一〇八〇年）、齢四十五にして黄州に流謫された。蘇軾はその黄州において、以前にも増して創作活動に励み、前後「赤壁賦」、「念奴嬌 赤壁懷古」詞、「東坡八首」詩等の名作を詠んでいる。このうち本稿で考察する前後「赤壁賦」は、蘇軾が黄州の赤壁こと赤鼻磯に、客人と共に月見の舟遊びに出かけ、客人と議論したり、夢に道士をみたりしたことを綴った作品である。これは周知の名作であり、先行論文も数多い。しかしその論点を整理してみると、殆どが「（前）赤壁賦」（以下前篇と称す）を対象とした研究であることが分かる。すなわち、①前篇に見られる老莊哲学等から、蘇軾の人生観や宗教観を論じたもの、②蘇軾は赤壁に遊び、前篇にかつて赤壁の戦いで大敗した曹操が登場するが、黄州の赤壁（赤鼻磯）は真の赤壁の古戦場ではなかった、そこで詩人の見立について論じたもの、③前篇の出典を究明したもの等である。「後赤壁賦」（以下後篇と称す）については、前後兩篇をまとめて鑑賞し、兩篇の内容表現の対照性を述べ、その対照性から後篇の存在を確認する論考等があるが、後篇のみを独自に論究したものは殆ど見当たらないようである。

そこで、筆者は今回新たに、前後「赤壁賦」に記された日付、すなわち前篇の「壬戌之秋、七月既望」つまり元豊五年七月十六日、後篇の「是歲十月之望」つまり同年十月十五日に着目して考察した。その結果、前後兩篇に影

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）

響を与え、しかしこれまで全く言及されなかつた幾つかの要素、就中、後篇の重要な出典と思われる東晋・孫綽の「遊天台山賦」を探しあてることができた。そこで本稿においてその報告をし、従来前篇に比べて研究が手薄だつた後篇独自の価値を見直し、それを以て新たに前後「赤壁賦」の主題を探り、引いては黄州流謫時期の蘇軾の文学を考ふる一助としたい。

—

まず論の必要上、前後「赤壁賦」の概要を述べておく。

前篇

元豊五年七月十六日、蘇子が客人と舟を浮べて赤壁の下に遊ぶ。明月が出ると飲酒し、唱歌する。客人の中に洞簫を吹く者があり、歌に合わせて奏したが、その音色は悲哀に満ちていた。客人は人生の束の間なことを愁えていたからである。蘇子はそこで老荘哲学を用い、物事の可変性と不変性を説いて客人を慰め、さらに江上の清風と山際の明月を楽しむことは誰に憚ることもないと言ひ、再び客人と共に楽しく酒を交わしたのであった。

後篇

同年十月十五日、月夜に帰宅途中、「予」すなわち蘇軾は再び舟遊びをしようと思ひ立ち、二人の客人と共に赤壁に出かけた。季節は移ろい、景色は打って変わっている。蘇軾は、岸に上り、独り岩山をよじ登った。客人たちはもはやついて来られない。舟に戻ると鶴が舟をかすめて飛んでいった。そして蘇軾は眠り夢に一道士をみる。道士は「赤壁の遊びは楽しかったか」と問う。蘇軾はその名を問うが道士は答えない。そこで「さては先ほどの鶴があなたか」と言う¹と、蘇軾は目が覚めた。

次に、蘇軾が黄州に流謫された経緯と、その流謫生活の状況について略述する²。神宗皇帝（在位一〇六七—一〇八五年）の時代に、所謂新法党と旧法党の争い³が起き、その政争に巻き込まれた蘇軾は、その詩文に朝政を諷刺する部分があり、皇帝に対して不敬であるという咎を受け、御史台に投獄され百日を超して拘禁された。しかし幸い

にも二代前の仁宗皇帝妃の崩御に伴い特赦が検討され、結局「蘇軾」公準勅責授檢校尚書水部員外郎、充黃州團練副使、本州安置、不得簽書公事。」〔蘇文忠公詩編注集成總案〕卷十九〕となつた。蘇軾は、いわば体裁のよい名譽職を拝し、その実は黃州に定住すべきことを命じられ、公文書に署名できない、つまり政治的権力の剝奪を受けたのである。これが世に有名な筆禍事件「烏台詩案」である。

さて、元豐三（一〇八〇）年二月、四十五歳の蘇軾は黃州に到着した。黃州は、現在の武漢市の東に位置し、当地の人々が赤壁の古戰場と呼ぶ赤鼻磯があるだけの、鄙びた所であつた。³そこで、蘇軾はまず定惠院という寺院に寓居する。その頃の蘇軾の姿は、自らの「定惠院寓居月夜偶出」詩に次韻した「次韻前篇」詩の、以下の句に表れている。

饑寒未至且安居、饑寒 未だ至らず且つ安居す、

憂患已空猶夢怕。 憂患 已に空しくするも猶ほ夢に怕る。

つまり、餓えや寒さを心配することなく安穩としているけれども、その内心の痛手は夢にまで及び、なお拭い去り難いのである。こうして、蘇軾の黃州での五年に亘る生活が始まつた。しかし日を追うごとに生活は苦しくなり、黃州に至つた翌年ついに自ら耕作するまでに至る。これは蘇軾の有名な「東坡八首」詩に詳しい。また蘇軾はその黃州において、流謫による精神不安を安定させるため、仏教や道教に親しみ「東坡居士」と名号している。またその一方で、拙稿「蘇軾における『東坡』の意味」⁴において述べたように、朝廷復帰願望をあくまで持ち続けている。さらに、以前にも増して創作活動に励み、後に蘇軾の代表作といわれる名作を詠んでいるのである。

二

さて、蘇軾が流謫地黃州の赤鼻磯に遊んだのは、前後「赤壁賦」に表された二回だけであつたかというところ、そうではない。夙に饒学剛氏が指摘しておられるように、蘇軾の書簡等を見ると、この賦を創作した前後七回に亘つて、蘇軾は赤鼻磯に遊んでいることが確認される。では、そもそもなぜ蘇軾は赤鼻磯に遊ぶことを思いついたのである

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）

うか。以下の書簡を見よう。

寓居去江干無十步、風濤烟雨、曉夕百變、江南諸山、在几席上、此幸未始有也。（寓居は江干を去ること十歩無く、風濤烟雨、曉夕に百變し、江南の諸山、几席の上に在り。此の幸ひ、未だ始めより有らざる也。）

（「與司馬溫公五首其三」）

このように、蘇軾の寓居は、長江のすぐ側にあつたのであり、美しく変化する景色を眺め、外出を思いたつたのである。

そこでしばしば赤鼻磯に出かけるようになった蘇軾は、例えば、その弟子秦觀の表した題名について「秦太虚題名記」を表し、その文中で赤鼻磯の遊びに言及している。この記によれば、蘇軾は黄州に謫居した元豊三年の八月十五日より十日を経ない日に、息子の蘇邁を連れて、近隣の赤鼻磯に遊んだという。

また、蘇軾の「記赤壁」では、①黄州の寓居より数百歩に赤壁があること。②ここが周瑜が曹操を破つた所か否かは不明。③断崖の様子。鶻（ハヤブサ）の巢があり、蛇を見た者もあること。④岸边には洞窟があり、小さな石があること。何度もここに遊び二百七十個の石を集め、古い銅盆も拾つたこと等が記される。その記述から、語る相手もなく、ひとりしげしげと石をながめ、いくつもいくつも拾う蘇軾の姿が想像される。なおこの「記赤壁」に、後の前後「赤壁賦」で言及する曹操や鶻の巢が見られることは、注目に値する。

さらに、元豊四年、蘇軾は「次韻孔毅父久旱已而甚雨三首」詩を詠み、其の三で西州の楊道士が洞簫を善くすることに言及する。従来この楊道士が、前篇に登場する、洞簫を善くした客人であつたと言われている。

そして、元豊五年七月既望に「前赤壁賦」、同年十月望に「後赤壁賦」が創作される。その後元豊五年十二月十九日、すなわち蘇軾の誕生日に、蘇軾は赤鼻磯に遊び、李委秀才と知り合う。このことは蘇軾の「李委吹笛并引」詩に詳しい。

以上を要するに、蘇軾は長江のすぐ近くに寓居し、長江を眺めて外出を思い立ち、しばしば舟を浮べて赤鼻磯に遊んでいるのである。恐らく実際には、現存する詩文の記録以上に蘇軾はそこに遊んでいるに違いない。このように何度も遊び、前後「赤壁賦」のモチーフが次第に形成されたことを思えば、蘇軾は前後「赤壁賦」に日付を記さ

ず、漠然とした赤壁の遊びを描写しても良かったであろう。しかし蘇軾は前後「赤壁賦」に年月日を記し、その遊びの日付を限定し、特別なものとした。数ある同じ遊びの中から一兩日を切り取って作品に仕上げたのには、何か意味があるように思われる。

三

ではここで、韻文と日付の関係を考えてみよう。韻文は、読者が作品を鑑賞し、イメージを膨らます余地の大きいものである。よって季節感を出すためなら、例えば「春日」や「秋夕」等を詩題に書き添えればよく、必ずしも節句、月日、年月日等を記して、日付を特定することはない。試みに、『全宋詩』（北京大学出版社刊）北宋篇二十五冊を捲ってみても、詩題に日付を含む詩は寥々たるものである。ところがそれでも数人の作者は好んで日付を記している。例えば梅堯臣、韓琦、張耒、李光等であり、蘇軾もその一人である。

そこで以下に、蘇軾の詩・詞・賦における日付の記載状況を述べる。まず蘇軾の詩（詩題・序文・詩句を含む）について。蘇軾詩二千三百八十八首のうち、①冬至等の節句を記すもの、八十四首（うち節句に年数を付した十首を含む）。②月日を記すもの、八十六首（前作に続き、「何日」又は「是日…」とするものを含む）。③年月日を記すもの、二十四首である。この①の節句の詩は、例えば重九を詩題に書き添えて詩句に菊花を詠み込み、また例えば冬至の詩では陽射しの弱いことを背景としている。つまりこれらの詩は、節句を書き添えることによって、詩に詠まれた状況について、読者の理解を助けている。次に②の月日を記すものには、月日が旅行の記録となり、またこの日夢をみた等の備忘録の役目を果たしている。では③の年月日を記す詩には、その年月日がどのような効果をあげているであろうか。そこで以下に詩一首を例にして考察してみよう。

元豊七年十一月十三日、與幾先自竹西來訪慶老、不見、獨與君卿供奉・蟾知客東閣道話久之。（元豊七年十一月十三日、幾先と竹西より來たり慶老を訪ぬるも、見えず。獨だ君卿供奉・蟾知客と東閣にて話を道ふこと之を久しうす。）

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）

卷卷長廊走黄葉、 卷卷として長廊に黄葉 走り、

席簾垂地香煙歇。 席簾 地に垂れ香煙 歇（や）む。

主人待來終不來、 主人の來たるを待てども終に來たらず、

火紅銷盡灰如雪。 火紅は銷（き）え尽き灰雪の如し。

公自注、惠州追録。

この詩題は、蘇軾が友人杜介（字幾先）と、仏寺に慶老を訪ねたものの会うことができず、別の知人時君卿や「知客」すなわち接待係の僧と雑談した、というものであり、詩には待ち人來らずの様子が描かれている。何の変哲もないようであるが、この日付に注目して考察すると、この詩の新たな側面が浮かび上がってくる。

蘇軾は、元豊七年正月に流謫地黄州から、檢校尚書部員外郎はそのまま、汝州団練副使・本州安置に遷され、そのため黄州から汝州への旅が始まった。そして長江を下り常州付近まで来たところ、常州の陽羨溪辺りの宜興に田地を買い、居住を乞うことにした。そこでまず人を宜興の官吏のところ遣って田地の代金を支払わせることにし、蘇軾はその帰りを待っていた。その経緯は以下の書簡にみえる。

某宜興已得少田、至揚附遞、乞居常、仍遣一姪孫子賈錢往宜興納官、蓋官田也、須其還、乃行。而至今未來、計亦無他、特其子母難別爾。見艤舟竹西待之、不過更三兩日必至、必能於冬至前及見公也。（某宜興に已に少なき田を得たり、揚附の遞に至り、常に居するを乞ふ、仍へよつて一姪孫子をして錢を賈へも）ち宜興に往き官に納めしむ、蓋し官田なればなり、其の還るを須へま）ちて、乃ち行かん。而れども今に至るまで未だ來たらず、計るに亦た他無し、特だ其の子母の別れ難きのみ。見へげん）に舟を竹西に艤して之を待つ、更に三兩日を過ぎずして必ずや至らん、必ず能く冬至の前に公に見ゆるに及ばん。）（「答秦大虚七首其五」）

このように、蘇軾は竹西に舟を着け、そこであと二・三日待てば、使いに遣った人が戻り、冬至の前には書簡の相手の秦觀にも会えるだろうという。蘇軾はその後さらに友人に書簡を書き送り、ついに常州の人になるまでの経緯を述べている。すなわち、「僕已買田陽羨、當告聖主哀憐餘生、許於此安置。幸而許者、遂築室於荆溪之上而老矣。（僕已に田を陽羨に買ひ、當に聖主に告げて余生を哀憐し此に安置するを許されんことを。幸ひにして許さるれば、

遂ひに室を荆溪の上に築きて老いん。」（答賈耘老四首其二）「近於陽羨買得少田、意欲老焉。尋奏乞居常、見邸報、已許。（近ごろ陽羨に少へいささ）かなる田を買ひ得たり、意は焉に老いんと欲す。尋へついで奏して常に居するを乞ふに、邸報を見るに、已に許されたり。」（與千之姪二首其一）「已買得宜興一小莊、且乞居彼、遂爲常人矣。（已に宜興に一小莊を買ひ得たり、且つ彼に居するを乞ひ、遂ひに常人と爲れり。）」（與潘彥明十首其一）このように蘇軾は、その居住を心待ちにしていたのである。

さて、先に掲げた詩に話を戻そう。元豊七年十一月十三日は、冬至の前、すなわち蘇軾が田地を買い、常州居住の件を具体化しようとし始めた頃と考えられる。その頃は書簡に見えるように竹西に身を寄せていたから、そこから、友人杜介と共に慶老を訪ねたのだが会えなかったのである。ここでこの詩の自注である「惠州追録」に注目しよう。惠州は蘇軾が元豊七年から十年後に貶された、現在の広東省惠州市である。いよいよ南方惠州に貶された蘇軾は、かつて同様に流謫の身でありながら、常州居住を定めた頃の出来事を思いだし、この詩を作り追録したのであろう。慶老については蘇軾の他の詩文に見えず、いかなる人物か不明であり、（恐らくは僧侶であると思われるが）、それは逆にいうと、二人はこの詩に描かれる時に会えなかっただけでなく、その後も音信不通なのかもしれないのである。蘇軾は惠州にて慶老のことを、あの时会えなくて真に残念であったと思ひ出し、當時を偲んで追録したのであろう。この詩にわざわざ日付を記したのは、竹西滞在当時においても、惠州にて追憶する時においても、蘇軾にとってその出来事が、様々な記憶と共に特に印象深く思ひ出されたためであったと思われる。

次に、蘇軾の詞と日付について考えよう。蘇軾詞二百七十余首のうち詞の小題に、節句（年数を含む）を記すもの十四首、月日を記すもの三首、年月日を記すもの四首がある。これらは数こそ少ないものの、詞は本来男女の情愛等を抽象的に歌うものであるから、詞に小題を付け、作者個人の体験や感慨を述べることは、異例であり特筆すべきことである。従来蘇軾詞が「以詩爲詞」といわれる恰好の例といえよう。

次に蘇軾の賦について述べると、蘇軾の賦は二十七篇あり、そのうち「颺風賦」は「仲秋之夕」の文句から作品が始まっている。そして前後「赤壁賦」は本稿の冒頭で触れたように、年月日から作品が始まっている。

つまり、先掲の詩や詞の日付に見られるように、蘇軾の韻文に年月日が記される時には、蘇軾がそれによって意

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）

識的に何かを伝えようとしているように思われるのである。その意味でも前後「赤壁賦」をその日付から考察することは、有意義であろう。

四

さて、前章において述べた蘇軾の韻文と日付の関係をまとめると以下のことがいえる。すなわち、まず、蘇軾は節句など世間一般に知られる日付を記すことよって、その日に付随する習慣を背景として、韻文の内容を分かりやすくして作品とした。次に、蘇軾個人に特別な事柄が起こって、それを特に記録する意味でその日付を記した。そこで、前後「赤壁賦」を日付から考察するために、その一兩日、すなわち七月既望と十月望に当時どのような行事が催されていたのかを述べる。

まず七月既望すなわち十六日について。その前日の七月望すなわち十五日は仏教でいう盂蘭盆会であり、道教では中元節である。唐代の韓鄂はその著『歳華紀麗』の中元の項において「通門宝蓋、献在中元、釋氏蘭盆、盛於此日」という。時代は下って『東京夢華録』卷八に拠れば、北宋の都開封の市中では賑やかに物を売り、「目連救母劇」を上演し、先祖に精進料理を供え、郊外に新墓の有る者はこの日に墓参に出かけ、本院では大法要が催される。また記録は蘇軾の時代よりやや下るが、宋南渡後の都の雑事を記録した『武林旧事』卷三や『夢梁録』卷四でも、同様に先祖を祀るといふ。こうしてみると、蘇軾の時代にも唐代から続く行事があつていたといえよう。さらに重要なのは、蘇軾が前篇を記した七月既望は、蘇軾の故郷蜀の眉山において、特別な祭日であつたことである。蘇軾は故郷を離れてからもしばしば故郷を回想しており、次のような記録がある。

吾州俗、…（中略）…七月既望、殺艾而草衰、則仆鼓泮漏、取罰金與償衆之錢、買羊豕酒醴、以祀田祖、作樂飲食、醉飽而去、歲以爲常。（吾州の俗は…中略…七月既望、殺艾へかゝり草衰へば、則ち鼓を仆へたおし漏を決し、罰金と償衆の錢を取り、羊豕酒醴を買ひ、以て田祖を祀り、樂を作し飲食し、酔ひ飽きて去る、歳以て常と爲す。）

（「眉山遠景樓記」）

この文中の「罰金」とは農作業に遅刻した者や怠けた者から徴収した金であり、「償衆之錢」とは少数で多くの田地を耕作した褒賞金のことである。さてこの文は、秋の収穫後、美酒や肉を買って農業の神を祀り、楽しく飲食して満足して帰ることを記している。要するに、蘇軾が記した前篇の日付は、仏教や道教の祭日の翌日であり、また故郷眉山の祭日当日であり、異郷に流謫された蘇軾を除き、世間では賑やかに過ごしていた祝日であったのである。

次に、十月望すなわち十五日について。まず以下の蘇軾の詩をみよう。

己未十月十五日、獄中恭聞太皇太后不豫、有赦、作詩。（己未十月十五日、獄中にて恭しんで、太皇太后不豫、赦し有るを聞き、詩を作る。）

庭柏陰陰晝掩門、庭の柏は陰陰として晝は門を掩ひ、

烏知有赦闇黃昏。烏（いづくん）ぞ知らん 赦し有って 黃昏 闇（かまびす）し。

漢宮自種三生福、漢宮 自ら種う三生の福、

楚客還招九死魂。楚客 還た招く九死の魂。

縱有鋤犁及田畝、縱（たと）ひ鋤犁及び田畝有るとも、

已無面目見丘園。已に丘園に見ゆるに面目無し。

只應聖主如堯舜、只だ應（まさ）に聖主は堯舜の如く、

猶許先生作正言。猶ほ先生に正言を作すを許すべし。

このように烏台に投獄されていた蘇軾は、元豊二年十月十五日に、太皇太后の病氣により赦免があるのを聞いた。蘇軾は詩中で、漢軍に追いつめられて烏江までやって来た項羽のように、たとえ出獄し帰郷しても人々に会わせる顔が無いと言い、ただ神宗の聖断に従うだけだという。しかしともかく苦しく不安な監獄から出ることができるとある。おそらく赦免に一縷の望みを託していたであろう。そして、十月二十日にかねてより蘇軾を擁護していた太皇太后が逝去した。蘇軾はまだ罪人であったので、その喪に服することができずにただ挽詞を作っている。そして先述のように、神宗の裁決により、蘇軾の官位を下げ、黄州に流すことが決まったのであった。

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）

さらに、もともと下元節すなわち十月望は宮中で比較的大きな行事があつて⁽¹⁰⁾いた。そして蘇軾が前後「赤壁賦」を詠んだ元豊五年は宮中行事に些か変化が起きている。時の皇帝神宗は新たに宮殿を作り、以下のように詔を發した。

詔自今朝獻孟春用十一日、孟夏擇日、孟秋用中元日、孟冬用下元日、天子常服行事。〔宋史〕卷一百九 禮志

このように宮中では、春夏の一日に加え七月十五日と十月十五日に、皇帝が行事をすることになったのである。こうしてみれば、中元節と下元節は宮中行事にとっての大きな節目であつたといえる。ところが罪人である蘇軾は、元豊二年十月十五日には獄中に居り、またその後黄州に流謫し、元豊五年十月望にも、当然宮中行事の参詣を許されなかつた。十月十五日に宮中行事に参詣できないことは、士大夫たる蘇軾にとって、真に辛い処遇だったのである。

以上を要するに、前後「赤壁賦」の日付つまり元豊五年の七月望及び既望は、世間では賑やかに祭日を楽しみ、宮中では行事があるが、異郷に放逐された蘇軾はそれに参加できないでいる。また十月望は、蘇軾は宮中行事に参加できないばかりか、三年前の獄中の辛酸を思い出す日でもある。つまり、前後「赤壁賦」の日付は、特定の日の民間習俗や宮中行事を背景にしながら、蘇軾個人の持つ苦悩を殊更深く感じさせる日であつたといえよう。

五

さて、前章に於いて明らかにした前後「赤壁賦」の日付の、社会的・個人的背景は、前後両篇それぞれの持つ雰囲気、すなわち前篇の、苦悩の中に楽しさや希望があることや、後篇の凄惨な孤独に影響していると思われる。しかし、これらの要素を指摘しただけでは、まだ後篇が些か不可解であるといえよう。というのは、後篇では客人と共に楽しく遊びにやってきた蘇軾が、赤壁に到着するや却って共に楽しむべき客人を置き去りにして、十月十五日という冬空の下、赤壁山をよじ登っていくからである。いったいなぜ蘇軾は独り赤壁山をよじ登らなければなら

かつたのか。管見の限り、この点に言及した論考は見当たらない。

そこで筆者は、後篇に日付があり、しかも夢に道士をみるという、日付と記夢が併用されることに着目した。北宋詩についていえば、日付を記す詩には、しばしば夢の記述がみられるのである。具体的には蘇軾詩のうち、詩題・序文・詩句のいずれかに日付と記夢のあるものは七首ある。そのうち、以下の詩（前半のみ）を読んでみよう。

贈杜介并敘（杜介に贈る 叙を并す）

元豊八年七月二十五日、杜幾先自浙東還、與余相遇於金山、話天台之異、以詩贈之。（元豊八年七月二十五日、杜幾先 浙より東に還る、余と金山にて相遇し、天台の異を話す、詩を以て之に贈る。）

我夢遊天台、我 天台に遊ぶを夢む、

橫空石橋小、空を横ぎり石橋 小さし。

松風吹茵露、松風 茵露を吹き、

翠濕香嫋嫋。翠湿 香り嫋嫋たり。

應真飛錫過、應真 錫を飛ばして過ぎ、

絶磻度雲鳥。絶磻に雲鳥 度（わた）る。

舉意欲從之、意を挙げ之に従はんと欲せば、

恹然已松杪。恹然として已に松の杪（こずゑ）にあり。

微言粲珠玉、微言は粲たる珠玉、

未説意先了。未だ説（い）はずして意先了（わか）る。

覺來如墮空、覺え来たれば空に墮つるが如し、

耿耿窗戶曉。耿耿として窓戸は曉なり。

羣生陷迷網、群生 迷網に陥り、

獨達從古少。獨達は古より少なし。

（以下、詩の後半は杜幾先の道を得た様子を描く。略）

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）

このように、蘇軾は夢に天台山に遊び、「應真」すなわち仏教の修道者である阿羅漢に会い、その言葉を聞き、超人的な様子を見るのだが、目が覚めると平凡な朝が来ているばかり、古より道に達する者は殆どいないというのである。この状況設定は、甚だ「後赤壁賦」の、蘇軾が夢に道士を見、言葉を交わすが、目覚めて、戸を開いて道士を探しても見つからなかったというのに、似ている。ところで、この詩第二、四句の描写及び第五句の「應真飛錫過」は、東晋・孫綽の「遊天台山賦」を出典とするであろう。この「遊天台山賦」は『文選』卷十一にも収録されている、天台山を語った作品の嚆矢であり、天台山を語る時には当然蘇軾の念頭にあったものと思われる。

ここでこの賦の概要を述べる。

作者孫綽は心を馳せて天台山に遊び、その様子を述べることにした。天台山は神仙境である。孫綽はこの険しい岩山に登り、登り終えると仙人の都に到着し、不思議な自然と建物をみる。ここでは、温風が南側の林に香りを起こし、道を得て鶴に乗って家人の前に現われたという王子喬や、錫杖を持った阿羅漢が天空を歩んでいる（「應真飛錫以躡虚」）。そして孫綽は悟りを得て、仙人たちと議論を楽しんだが、言葉は仮の手段であると悟っている。誰も口を開けなかつたのと同じであった。こうして自然に同化したのである。

さてこの賦では、孫綽が危険な岩山をよじ登り、その先に進んでいる。この、岩山をよじ登るといふ点では、「後赤壁賦」も同じである。そこで両者の表現を以下に比較してみよう。（両者の類似する表現を①～⑥の番号で表示する。）

被毛褐之森森、振金策之鈴鈴。①披荒榛之蒙籠、②陟峭岬之崢嶸。濟檜溪而直進、落五界而③迅征。跨穹隆之懸磴、④臨萬丈之絕冥。⑤踐莓苔之滑石、搏壁立之翠屏。⑥攬膠木之長蘿、援葛藟之飛莖。雖一冒於垂堂、乃永存乎長生。必契誠於幽味、履重嶮而逾平。（獸毛のふさふさした衣を着、錫杖をりんりんと鳴らし、鬱蒼と生い茂った草木をかき分け、そびえ立つ高崖を登り、檜溪を渡って真つすぐに進む。天台山のある五界の境界に下り速度を上げ、アーチ型の石橋を跨ぎ、遙かに深い谷底を見おろす。苔で滑る石橋を踏み、その辺りの岩壁を掴み、枝の曲がった木に絡む長い葛を掴み、蔓の枝をピンと引つ張る。ここでの危険は大きいけれども、これによって永久に生きることができなのだ。必ず本当に道に達しようとするなら、どんなに険しい場所を行っ

ても一層平坦に感じられるのである。)。

(孫綽「遊天台山賦」)

予乃攝衣而上、②履巉巖、①披蒙茸、③踞虎豹、⑥登虬龍、⑤攀栖鵲之危巢、④俯馮夷之幽宮、蓋二客不能從焉。(そこで私は衣をからげて岸に上がり、険しい岩を踏み、青々と繁る草木をかき分け、虎や豹に似た怪石に腰かけ、蛟や龍に似た古木に登り、ハヤブサの栖む高樹の上の巢によじ登り、水底深くにある水神の宮殿を見おろす。もはや二人の客人は私について来れないようだ。)

(蘇軾「後赤壁賦」)

これらの傍線部はそれぞれ、表現こそ違うが内容に共通点がある。すなわち、①密生した草木をかき分け進む。②切り立ち険しい岩山を登る。③片や速度を上げてゆき、片や一休憩する。④遙か下方の水底を臨む。⑤危険を冒してゆく描写。⑥草木の描写とそれを使って行く描写、である。この「遊天台山賦」は、既に石川忠久氏が指摘しておられるように、岩山をよじ登る様子を描写した点に特色がある。蘇軾がその「遊天台山賦」を意識して「後赤壁賦」を創作したことは、その描写の共通点と前掲の「贈杜介」詩から、ほぼ疑いが無いであろう。

では、なぜ蘇軾はこの作品を意識したのであろうか。振り返って考えてみると、十月十五日は蘇軾個人の持つ苦悩が殊更深い日であった。そこで蘇軾は、孫綽が危険をもともせず岩山をよじ登り、神仙境へ行き悟りを得たことに憧れ、その追体験、すなわち赤壁山を天台山に象徴される仙境に見立て、登り詰めて、自らの苦悩を軽減することを切望し、試みたのである。このように考えなければ、客人たちもついて来れない険しい岩山を、しかも冬空の下によじ登った蘇軾の心情が理解できないであろう。

ところが、孫綽が岩山を登り詰めて仙境に入ったのとは相反して、蘇軾を待っていたのは、厳しい冬の現実だけであった。そこで蘇軾は「予も亦た悄然として悲み、肅然として恐れ、凜乎として其れ久しく留まるべからざる也。」悲しみ恐ろしくなり、再び舟に戻るしかなく、さらには現実とは懸け離れた夢に活路を見出すしかなかったのである。しかしその夢もまた、孫綽が仙人たちと十分に議論し悟りを得たのとは相反して、僅かな会話もままならず目覚めてしまう。真に「贈杜介」詩に表現されるように、「群生迷網に陥り、独達は古より少し。」衆生が修道するのは難しいのである。

だからこそ、読者が「後赤壁賦」を鑑賞すると、それが悲哀に満ちたものを感じられるのである。

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について(正木)

おわりに

このように、「後赤壁賦」は確かに悲哀に満ちている作品である。しかし、蘇軾自身はこの前後兩篇の出来に満足していたようである。⁽¹²⁾では、蘇軾はこの作品において何を表そうとしたのか。

ここで日付の持つ背景から前後兩篇を読み直してみよう。まず、前篇の日付である七月十六日は、十五日の孟蘭盆会や中元節、十六日の眉山の収穫祭等、本来賑やかに楽しむべき日であった。本来蘇軾の家柄は、士族ではなく中産階級であり、祖父の蘇序はわずかの田畑を持ち、粟を植えていたというから、蘇軾にとって十六日の収穫祭は身近かなものだったであろう。ではこの賑やかな日に蘇軾はどうしていたか。すなわち蘇軾は黄州に流謫して二年、ただ客数人とだけ舟を浮べて赤鼻磯に遊んでいた。清風が川面を静かにわたり、月が出て、その中にいると「飄飄乎として世を遺（わす）れて獨り立ち、羽化して登仙するがごとし。」蘇軾は現実の流罪も賑やかな祭日のことも忘れて、自由の身になり天上世界へ行こうとする気分である。そして辛い現実を忘れてこそ「於是飲酒樂甚、扣舷而歌之。」即ち飲酒して楽しく、舷（ふなばた）を叩いて歌い出すのであり、客人の愁いに仮託された自らの愁いを、老莊哲学を駆使して、解くことができたのである。

後篇では、明月の下で再び赤鼻磯の舟遊びを思いつき、客人と妻の助けを借りて酒と肴を揃え、楽しく出かけている。ところが、この日、心中に深い苦悩のある蘇軾は赤鼻磯に到着するや、もはや苦悩を押さえ切れず、共に楽しむべき客人を置き去りにして、独りで岩山によじ登って自らの愁いを解こうとする。しかし蘇軾を待っていたのは厳しい冬景色だけであった。そこで舟に戻り、夢に活路を見出そうとしたが、東の間の道士との会話も、目が覚めれば、捉えどころがない。

こうしてみると、前後兩篇の主題はともに、蘇軾の自らを救う道の模索といえよう。すなわち前篇では、現実から懸け離れた明月等の自然と老莊哲学が蘇軾の愁いを一時的に解いたが、後篇では、「遊天台山賦」の追体験が失敗に終わり愁いは深まるばかりであった。ここで広く蘇軾の黄州流謫時期について考えてみれば、前後「赤壁賦」

のこのような主題は、この時期に蘇軾が自らを救おうと模索した軌跡と一致する。すなわち蘇軾は、既に指摘のあ
るように、仏寺に行き黙想し、道教の養生を試み、「東坡居士」と名号し、「東坡易傳」を著して本来の士大夫の
生き方に固執し、手当たり次第という趣きで精神の安寧を図ったのである。それは時にはうまくいったように感じ
られ、時には全く成果がないように感じられたであろう。それらを集大成し、そして文学を以て表現したのが、こ
の前後「赤壁賦」における自らを救う道の模索なのである。その模索の結果、作品は蘇軾の苦悩を昇華させた仕上
がりになり、読者はこの作品中における、蘇軾の苦悩よりも世俗を超絶した遊びに魅力を感じ、赤壁の清遊と評し、
古今の絶唱という。後に蘇軾が流謫地海南島でこの賦だけを楽しんでいたと伝えられる所以はここにあると考えら
れる。

最後に、前篇に老荘哲学が用いられ、後篇に道士が登場することから、両篇が道教と関係のある作品のように見
做されていることについて述べておく。既に述べたように、後篇は「遊天台山賦」を下敷きにした作品であり、
「遊天台山賦」では天台山は、道教や仏教等広く神仙境として描かれている。それは、詳しくは石川忠久氏に指摘
があるが、「遊天台山賦」の中に道教的・仏教的・神仙的表現が混在することから知られ、例えば『列仙伝』にみえ
る王子喬と仏教の修道者である阿羅漢が同時に登場することからも窺える。さてこの「遊天台山賦」を同じく下敷
きにした作品として、蘇軾の「後赤壁賦」と「贈杜介」詩は、姉妹篇と見做すことができる。そのうち後篇では道
士が登場し、「贈杜介」詩では阿羅漢が登場する。この「贈杜介」詩は、その後半に述べる杜介が仏教信徒である
ために阿羅漢が登場したようだが、だからといって、後篇は蘇軾が道教信徒であるために道士が登場したとは言え
まい。というのも仏教や道教の聖地はその他にもあるのだから、蘇軾がわざわざ天台山を語るのは、仏教や道教な
どの別を越えた神仙世界に興味があったと考えられるためである。よって後篇において蘇軾は仏教・道教に関らず、
人知を越えた力に自らの救いを求めたのである。従って後篇は、従来のように殊更道教と関係づける必要はなく、
また前篇も同様である。従来の説はむしろ、後篇のこの出典を考慮していないための誤解に基づくといえよう。

さらに、この前後「赤壁賦」を創作した元豊五年に、蘇軾は「東坡居士」と名号している。「東坡居士」が真に
在家仏教徒の表明なのか或いは道教徒の表明なのか、仮に仏教徒としてもその悟りはどの程度のものであるかは、

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）

議論のあるところである。しかし少なくとも、同じ年に、片や仏教徒の表明としての「東坡居士」を名号し、片や道教の影響のある前後「赤壁賦」を創作するという見方は、今後見直す必要がある。蘇軾は、前後「赤壁賦」の創作において、仏教や道教に関らず広く人知を越えた力を借りて黄州に流謫された自らを救う道を模索したのではないかと、筆者は考えるのである。

注

*本稿は『蘇軾詩集』（清・王文誥輯註、『蘇文忠公詩編註集成』を底本とする、孔凡礼点校、中華書局、一九九二年）

と『蘇軾文集』（孔凡礼点校、中華書局、一九九二年、項煜序を有する『蘇東坡先生全集』を底本にする。）に拠った。

(1) 一九九六年十一月当時蘇州大学に於てご研究されていた韓国ソウル大学校中語中文学科柳種睦助教授からの手紙によれば、今日の中国では、赤壁の古戦場即ち嘉魚の赤壁を「三国赤壁」、黄州の赤壁を「東坡赤壁」という。ご教示下さった柳先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

(2) 林語堂著、合山訳『蘇東坡』（明德出版社、一九八〇年四版）、近藤一成「東坡の犯罪——『烏台詩案』の基礎的考察——」（『東方学会創立五十周年記念東方学論集』、一九九七年）、内山精也「東坡烏台詩案考（上）」（『橄欖』七号、一九九八年）等参照

(3) 蘇軾没後六十九年、陆游は『入蜀記』巻四に以下のように記す。「乾道六年八月）十八日。食時方行。晡時至黄州。州最僻陋少事。」

(4) 拙稿「蘇軾における『東坡』の意味」（『中国文学論集』第二十五号、一九九六年）

(5) 饒学剛「前後『赤壁賦』游踪考」（蘇軾研究学会編蘇軾研究論文集第四輯『東坡文論叢』四川文芸出版社、一九八六年）

(6) 八月十五日は、中秋節であり、また例えば蘇洵の「嘉祐六年八月十五日賜林悦」二首詩について『林氏宗譜』が「侍御臣林悦乞歸祭掃祖墳」というように、異郷にいる者にとって故郷を思念する日でもある。『全宋詩』巻三五四を参

照されたい。

- (7) この数字は、『傳幹注坡詞』（宋・傳幹注、劉尚榮校証、巴蜀書社、一九九三年）を底本として算出した。
 - (8) この点については既に、村上哲見『宋詞研究』（創文社、昭和六十一年、三三〇頁等）に指摘がある。
 - (9) 十月二十日、恭聞太皇太后昇遐、以軾罪人、不許成服、欲哭則不敢、欲泣則不可、故作挽詞二章。
 - (10) 治平元年：（中略）：詔每歲下元朝謁如奉眞殿儀、有期以上喪或災異、則命輔臣攝事。（『宋史』卷一〇九禮志）
 - (11) 石川忠久「孫綽『遊天台山賦』について」（『二松』第五集、一九九一年）
 - (12) 東坡與客論食次、取紙一幅、書以示客云。「爛蒸同州羊羔、：（中略）：烹曾坑圃品茶。少焉、解衣仰卧、使人誦東坡先生『赤壁前・後賦』、亦足以一笑也。」東坡在儋耳、獨有二賦而已。（朱弁『曲洧舊聞』卷五）
 - (13) 祖父名序、甚英偉、才氣過人、：（中略）：在鄉里郊居陸田不多、惟種粟。（李薦『師友談紀』）
 - (14) 例えば、鍾來因『蘇軾與道家道教』（台灣學生書局、一九九〇年、四三五～四五四頁）、砂山稔「蘇符と蘇籀」（『東方宗教』第九十一号、一九九八年）
- （付記）本稿の一部は、一九九七年九月十六日、第九屆蘇軾學術研討會（於中國四川省眉山三蘇祠）において、中國語を用いて口頭発表したものである。この学会については、宋代詩文研究会編『橄欖』七号の拙稿「第九回蘇軾学会に参加して」を参照されたい。

日付から考察した前後「赤壁賦」の主題について（正木）